

6. 17年ぶりに県内で発生した豚流行性下痢の発生事例とその対策

玖珠家畜保健衛生所

○佐伯美穂（病鑑） 矢崎竜 木下正徳

【はじめに】

平成25年10月に沖縄県で7年ぶりに豚流行性下痢（PED）が確認された後、南九州での多発に伴い家畜飼養者および畜産関係者への情報周知および指導を行ってきたが、平成26年3月12日、A農場で本県では平成9年以来17年ぶりとなるPEDが発生した。約3週間で下痢による死亡は認められなくなり、死亡頭数174頭で沈静化した。その後、各ステージの抗体検査および環境拭き取り材料を用いた遺伝子検索の追跡調査を行ったので報告する。

【発生状況】

平成26年3月12日、A農場（母豚145頭）から母豚の食滞と哺乳豚約200頭での下痢発生の報告を受け、立入りし、哺乳豚の下痢便5検体すべてから豚流行性下痢ウイルス（PEDV）遺伝子を確認した。翌日、哺乳豚3頭を病性鑑定し、16日にPEDと確定診断した。

【農場の防疫措置】

農場に対し、症状が認められなくなるまでの間、豚の移動自粛の要請および車両消毒等まん延防止対策の徹底を指示した。さらに翌13日に関係機関を参集した対策会議を開催し、畜産関連施設等における人および車両の消毒の徹底を指示した。また、13日および17日に農場消毒を実施した。

【追跡調査の材料および検査方法】

- ①沈静から1, 2, 6ヵ月後の各ステージの豚の血清を用いた抗体検査を実施した。
- ②沈静から1, 2ヵ月後の各ステージの豚舎での糞便と環境拭き取り材料を用いた遺伝子検索を実施した。

【追跡調査の結果】

- ①1および2ヵ月後には20検体中17検体が陽性（中和抗体価最大256倍）で大きな変動は見られなかったが、6ヵ月後には22検体中12検体が陽性（同じく32倍）で大きく低下した。
- ②糞便からは検出されず、環境拭き取り材料からは1ヵ月後には検出されたものの、オールアウト、洗浄、消毒を実施した2ヵ月後には検出されなくなった。

【まとめ・考察】

今回PEDが発生したA農場は約3週間後に沈静化した。また、追跡調査では抗体価が6ヵ月後には大きく低下し、検出されない個体も認められ、沈静後の新たなウイルスの動きはなかったものと考えられた。

A農場の場合、分娩舎がオールイン・オールアウトが可能な構造であり、洗浄・消毒の徹底をすることで早期終息につながったと推察された。しかし、各豚舎で抗体価が大きく低下しており、再感染した場合被害が大きくなる懸念がある。今後も引き続き飼養衛生管理基準の徹底を指導し、ワクチン接種を含めた再発生の防止に努めていきたい。